

文語日誌（平成二十七年七月二十七日）

神保町の古書肆大雲堂にて標記書籍を購入す。發行所は東京市神田區四小川町二ノ一の合資會社明治出版社なり。初版大正六年、本書は大正十年刊三版なり。本文七六七ページの名著にて、近世大家の手に成る名文よりその精粹を聚む。編者（文學博士岡田正之及び文學士佐久節）曰く、「青年子弟の讀書力、作文力を養ひ、兼ねて徳性と趣味を養ふ料にもと編纂す」と。

内容の一端を幾つか例示せば以下の如し。

鹽谷宥陰（幕府の儒官）の「近古史談引」は、「近古史談」（大槻盤溪著）の序文なり。曰く、「憶ふ昔山陽賴氏に京師に従ひしとき、晡時（申の刻、午後四時頃）酒に侍し、前古英雄の事蹟を縱譚し以て常となす。」と。

賴山陽の「不識庵機山を撃つの圖に題す」は、上杉謙信（不識庵）が武田信玄（機山）の陣に斬り込みたる際の心事を詠む。曰く、「鞭聲肅々として夜河を過ぐ。曉に見る千兵の大牙を擁するを。遺恨なり十年一劍を磨き。流星光底（勢ひよく振り下す刀劍の閃光）長蛇を逸す。」と。

安井息軒の「三計塾の記」は、息軒の三計を以て塾名としたる理由を學生に示したるものなり。曰く、「三計とは何ぞや。一日の計は朝に在り。一年の計は春に在り。一生の計は少壯の時に在るなり。何を以て吾が塾に名づけたる。諸生の晏起と春嬉とを慮ればなり。」と。（晏起は起牀の遅いこと、春嬉は春情に驅られ遊樂に耽ることを指す。）

重野安繹の「霞關臨幸記」は、明治天皇の霞關大久保利通邸に幸せられたることを述べたものなり。曰く、「明治九年四月十九日、車駕參議兼内務卿大久保利通の第に幸し給ふ。第は霞關に在り。地勢高爽にして下城市を瞰む。凡そ官署の布置、肆塵（肆も塵も商店）の交錯、燦として眉睫（まつげ）に列る。東南海を望めば、風帆雲鳥、碧波浩蕩（廣大なる形容）の中に出沒す。其の灣泊（舟泊、すなはち港）には、則ち歐艦美舶麤至（羣り來ること）輻輳し、旗章搖搖として日に閃く」と。

小生、日本人として、日本人作の漢文脈には格別の親しみを感ぜざるを得ず。中高一貫教育の中學二年より高校三年まで毎年「テラカン（寺漢）」先生の漢文の講義を受けたること一因なるらむ。先生、中二、中三、高三の擔任にて、「希望の朝を迎へ、勤勉の書を過ごし、感謝の夕べを送る」を生活信條として毎朝授業にて皆にて坐禪を組みつつ聲を合せたるは懐かしき想ひ出なり。今は亡き先生、年賀狀は常に自筆の漢詩を下されり。また、小生の結婚披露宴にて過分の祝辭を頂きたるは有難き幸せなりき。

（平成二十七年八月二十一日受附）